

万貴

○滝巡り妖しいものを持ち帰る  
○今だったら解り合えるね振り花  
代筆の余白を充たす蝉しぐれ

さえ

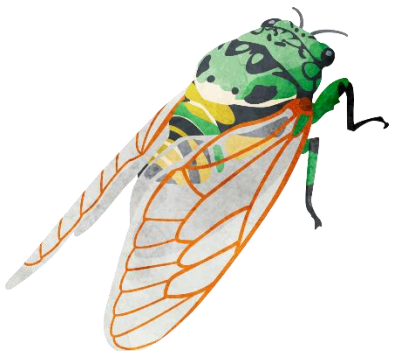
○図書館の窓は透明夏の果て  
細道の撫子の咲き乱れたる  
羽脱け鳥頭を並べ餌をつく

志津子

梅雨明けやボタンクサギの咲く空家  
一斉に蝉の鳴き出す日の出前  
雷や魚影の動き速きこと

富子

○考と行きし滝の飛沫がまだそこに  
○待つという愛情ありて酔芙蓉  
まだぬけ殻にはなれぬ六七歳



千代

○丘の風まとひじゃがいも花盛り  
蝉の音に応へるやうに鴉啼く  
遠き日のクラス写真や滝しづき

ふみ子

○蝉の羽化終わる頃には子は眠り  
滝仰ぐ少しの時間沈黙す  
ウォーキング一つ日傘の老夫婦

農子

○反抗期の可憐な花よ振り花  
子等を待つ朝の公園蝉時雨  
空蝉のしがみつきおり自転車へ

初江

○羽化の蝉啜える猫の裏の顔  
奥入瀬溪流覚えきれないほどの滝  
朝の蝉壁に五輪放送表

富江

○遠き日の昭和スクリーン蝉時雨  
○断捨離は登山靴からまず一歩  
滝飛沫頬に優しく山の香よ

美貴

○空蝉に縋る葉先のありにけり  
初蝉の一声あげてそれっきり  
熊蝉の声の揺さぶる大樹あり

丞子

○空振りの空でぶつかる捕虫網  
仁淀ブルーへ悲鳴がどぼん滝すべり  
鈴生りに蝉の生る木や人語なし

えり

○滝どどどかっぱが群れて通りけり  
せいせいと生死の間を蝉急ぎ  
何事か川蝉鳴いて振り向かず

味元 昭次 作品

奥土佐の滝の一条見に行かむ  
空蝉ほど正直な人まだ知らず  
滝音の五輪ごりんと響きけり

★次回市民句会

【開催日時】

令和三年九月二十二日(水)  
午後一時一五分〜午後四時(予定)

【場所】

オーテピア4階 研修室

どなたでも自由にご参加いただけます

